



フォースタン《パイプの頭》神奈川大学図書館蔵

目次

- 2009年 私の一冊
 『グーグル革命の衝撃』……………行川 一郎 2p
 『声が生まれる：聞く力・話す力』…伊藤 博 3p
- 【連載】図書館のススメ (その4)
 図書館の種類と利用できる館種案内…………… 4~5p
- 図書館の所蔵資料紹介
 『アマニタ・バンセリナ』
 『パワー オヴ フォトグラフィ』…………… 6p
- 貴重書目録『古典逍遙』刊行の時代
 (シリーズ・神奈川大学図書館の歴史を語る!④)
 ……………… 高橋 則雄 7p
- 図書館からのお知らせ ……………… 8p
- 今号の表紙 ……………… 8p
- 編集後記 ……………… 8p

図書館のコトバ

その④「ILL」

ILLとはinterlibrary loanの略で「図書館相互貸借」のこと。

一つの図書館で収集できる資料には限りがあるため、他の大学図書館などと相互に協力し合い、自館以外の資料の利用ができるようにする仕組みである。

必要な資料が神奈川大学図書館にない場合でもILLを利用すれば他の図書館の資料を取りよせ、利用することができる。

一部有料のサービスもあるが(学部生が他館の所蔵資料のコピーを取りよせる場合など)便利な制度なのでぜひ利用してほしい。

欲しい資料が本学図書館にない場合は、まずはカウンター(横浜は2F)にご相談を!



NHKスペシャル取材班 著『グーグル革命の衝撃』
(新潮文庫) 新潮社 2009年

請求番号：B348.49-236 (横浜開架：日本放送出版協会版)
007.3-421 (平塚開架：日本放送出版協会版)

経営学部 教授 行川 一郎

本書はNHK出版の同名書(初出2007)を新潮文庫に収録したものである。一般書籍の文庫化もそうであるがTV番組の書籍化といった「素材」の活用はクロスメディア戦略の一環として、近年、特にマーケティングのメディア戦略、プロモーション戦略の分野において様々な発展を見せている。より多くの人々への多様な公表・活用形態——ビジネス的に表現すれば色々な売り方——が生まれ、今日へと至っている。それは端的には出版・放送業界の生き残りのためともいえるだろう。なにしろメディア産業はどの分野、業界であろうともインターネット社会の発展の只中であって激震に揺れ荒波をかぶっている。新聞、雑誌、本が売れなくなり、重たい百科辞典が姿を消し、地上波テレビが視聴されなくなったのもみんなネットのせいだ、という言葉がここそこで聞かれる。うなずける部分もある。『グーグル革命の衝撃』では革新的な検索技術とたぐいまれなビジネスモデルがもたらした「検索社会」を取り上げているが、ネットで検索して済ませるといふスタイルは正にインターネット時代の申し子である。インターネットの影響と今後を自身に問うという意味合いも込めて、この一冊を取り上げた次第である。

2007年1月にTVでこの番組が放送された際に受けた驚きを、本書を読んで改めて思い出すことができる。それほどこのテーマと内容は衝撃的だった。知らない内にグーグルに頼り切っている人々の存在、それは自分では何も決めることが出来ない他動的な人々が蔓延する社会を見つけたのである。検索技術を完成させた天才たちは、莫大な情報をネット利用者の手もとに引き寄せてくれた。あたかも1950～60年代に物理学(力学)と材料工学をロケット工学へと結実させた科学者が宇宙への新時代をひらいたと同じ、もしくはそれ以上に革命的な時代変革の幕を、彼らはインターネットと周辺技術を使ってひらいたといっても過言ではなからう。ニューヨークタイムズがロケットで宇宙に行けると説く科学者を揶揄した記事を書き(1920年の社説)、アポロ11号月面着陸の時(1969年)になって記事を訂正したというのはよく知られた笑話的なエピソードだが、実はインターネットに対する私たちの感覚は正にそれと同じなのである。つまりB.C.vs A.D.ならぬインターネット前とインターネット後の社会の劇的な変容である。検索に限らず、ネットでここまで出来るとは誰も夢想だにしていなかったのではないだろうか。例を一

つ。個人的に検索がらみで思い出すのは新聞で読んだ日本のシャーロキアン(ホームズ研究家)の寄稿だ。“ネット前”はわざわざロンドンまで行って何日もかけて調べていたが“ネット後”はPCの前でクリックするだけ、というのである。なるほど、である。さて、「検索社会」を検証した本書の内容について、章を追って概観していこう。

「I.天才集団の牙城」という標題はいささか軽薄だがその奥深さ(というか怖さ)をよく描き出している。グーグルの企業としてのES(従業員満足度)の際立った高さ、グーグル検索がSEM(Search Engine Marketing)と密接に関連していること、検索結果に表示されないグーグル八分と称される状況がビジネスに深刻な影響をもたらすことなど、ガレージで生まれた検索ベンチャーがバックリンク解析の技術実用化によってブレイクスルーを起こし、優れた技術と卓越したアイデアを次々に実現することで巨大な存在になるまでを描いている。「II.広告革命」では自動プログラム(クローラー)による検索でデータを収集分類するシステムが生んだ「検索+ネット+広告」という組み合わせの新しいビジネス=ロングテールビジネスに光をあて、広告分野に予想を超えた影響をもたらしつつある状況を記している。「III.既存メディアを揺さぶるグーグル」は標題そのものの内容、「IV.誰が検索順位をあげるのか」もしかりだ。特にIV章では検索順位を変える手口(ウェブスパム)の横行とその悪影響について2003年の米大統領選挙の事例をグーグル爆弾という言葉とともに紹介している。更に個人属性データが収集利用される新時代の監視社会の深刻さも語られている。「V.グーグルに全てを委ねるのか」「VI.膨張する巨大IT企業の行方」「VII.人類のライフスタイルとグーグル」は本書の基軸テーマであるグーグルの社会的影響を取り上げており非常に興味深い。独禁法、表現の自由などに立ち向かうグーグルは地球規模のデータセンターを目指しているという。「グーグルは今、人類史上、例を見ない規模とスピードで発展を続けている(p.335)」。正にIT科学者の楽園であろうか。

しかし全てをグーグルに委ねることの危うさは言を待たない。ジョージ・オーウェル作『1984年』のビッグブラザーとは全く異質の怖さがグーグルにはある。「検索社会」の便利さに惑わされ、思惟を失っては何にもならない。私たちの未来の課題は大きい。(なめかわ いちろう マーケティング論)



竹内敏晴 著『声が生まれる：聞く力・話す力』
(中公新書) 中央公論新社 2007年

請求番号：B081-1882-49 (横浜3F開架)

工学部 教授 伊藤 博

著者竹内氏は、難聴の問題を抱えながら成長したために言葉を聞く・話すということに常人よりも敏感な感受性を養いながら生きてきた方で、長じて演出家となり、また声を発するというを体のレベルから捉えなおしていくとする独自のレッスンを創始した方である。その著者が声・言葉・話すことなどについて語っているのが本書である。声や言葉の土台に「からだ」というものを据えて考え、従って例えばうまく声を発することができない人に対してその人の意識を変えようとするのではなく、その人の「からだ」を何とかしようとする本書の発想法が、私には興味深かった。

本書は3つの章からなっている。第1章は16歳の時に新薬の効果で聴力を取り戻した著者が、通常の人よりも遅れて聞く能力と話す能力を獲得してゆく過程での種々の経験や発見が語られる。それは、自分では一生懸命話している積もりなのだがどうにも声が出ていないようだという気づきから始まる。著者は発声訓練として一高の寮歌に打ち込んだり謡の稽古をしてみたりと懸命の努力をする。また、声を出すためにはまず息を吐かなければならないということが、耳の聞こえない人間には必ずしも自明ではないという指摘がある。そして現在では声を発する時の息が浅い人々が多くなってこれは生命力の衰えを意味すると述べられていてはっとさせられる。息を吐くことの次にのはのどを開けてそれを声にすること、そして発せられた原声を口腔の形を調合することによりいくつかの母音に分化させて唇によって子音を付け加えること、さらに文章にリズムを与えること、など実に複雑な過程を経て人は話すことができる。これらの普通は意識されないままに通り過ぎる事柄に意識的な取り組みをせざるを得なかった著者の体験が興味深い。

大学を卒業した著者は、自分自身の課題に引き寄せられるようにして、新劇の道に進み裏方から演出家となる。第2章では、芝居の世界と関わる生活の中での、話すということについての著者の体験が語られる。ここでの主題は言葉によって世界とどう関係するかということだと思われる。まず、話す人自身の「からだ」との関係に注意が向けられる。話すということは「からだの奥のうごめく感じ」を中核として「ことばの原形質」のようなものが結晶してくるのを意識が捉えて構造化することであり、このような場合の話し言葉は体全体での表現の一部分で

あるなどと述べられる。しかしながら同時に、著者が演出家として実務上述べた言葉のように、これらの成り立ちから切り離されても意味内容だけで独立していることが要求される「ことば」もあることが意識される。次に、話す人と他者との関係について注意が転ぜられる。芝居のせりふとの関わりの中から、著者は「ことば」の大本には他者に対する働きかけ(アクション)があることを見る。そしてその働きかけの主体としての「からだ」が意識されるようになる。以上のようなことが、抽象論としてではなく演劇の場での体験を通して語られている。私には理解が難しい部分も若干はあるのだが、しかしそう言われれば確かにそうだと強く共感する部分がまた実に多かった。

著者は、その後自身の経験を基盤にして、文字通り言葉がうまく話せない人や何とか言葉を発することはできてもそれによって他人とうまくコミュニケーションがとれないといった人など、様々な人を対象にして「からだことばのレッスン」と銘打つワークショップを主宰するようになる。第3章では、このレッスンの現場に即した知見が語られる。「人が人に話しかけるとはどういうことか?」とか「なぜ声は届かないのか?」などの発問と著者独自の答えが興味深かった。

数学の講義は黒板を向いて無機質な声で、定理、証明、定理、証明、たまには例、・・・を繰り返すもので、それ以外に主観の入った説明を加えるなどは数学的記述の正確さを損なう所為と、実は筆者は長年の間思っていた。本学に赴任してからも数年間そのように講義をしていたし、講義において「教育的な配慮」をするという事も嫌いであった。そのような講義のやり方にしかし内心では疲れていた頃に本書を読んで、自分の中で何か反応するものがあつたように思う。「教育」云々という事とは別に、自分の声を学生に届けることを考えるようになり、また声が届かないと感じる場合にはその原因も吟味するようになった(原因の理解は解決に直結はしないけれど)。最近読んだ本の中で特に印象の深い本だったので、今回の機会に紹介させて頂いた。

(いとう ひろし 数学)

みなさんが利用できる図書館ということで、ここまで「横浜市立神奈川図書館」、「神奈川県立図書館」、「鶴見大学図書館」のご紹介をしてきましたが、今回は図書館の種類と、みなさんが結局どういった種類の図書館が利用できるのか、ご紹介していきたいと思います。

図書館といっても実はいくつか種類があり、提供しているサービスや対象者が異なります。一般的には主に下記の5種類に分けることができます。

- | | |
|-------------|---------|
| ① 国立図書館 | ③ 大学図書館 |
| ② 公共（公立）図書館 | ④ 学校図書館 |
| | ⑤ 専門図書館 |

では、それぞれどのような図書館なのか、そしてみなさんが利用できるのかをご案内していきます。

① 国立図書館 〈神大の学生・教職員利用可〉

国立国会図書館が、日本における唯一の国立図書館で、国内最大規模の図書館となります。国立図書館は国民全体をサービス対象としていますので、みなさんも利用することが可能です（ただし18歳以上という制限があります）。国立国会図書館は「東京本館」（永田町）「関西館」（京都）「国際子ども図書館」（上野）の3館で構成されています。ここにある資料は、納本制度というルールに基づき、国民が納入した出版物を中心にして蔵書を構築しています。最近では、図書館に行かなくても文献のコピーを取り寄せることができるサービス等も提供しています。

国立国会図書館ホームページ <http://www.ndl.go.jp>

② 公共（公立）図書館 〈神大の学生・教職員利用可〉

主に地方自治体が設置する公立図書館です。以前紹介しました「神奈川図書館」「神奈川県立図書館」が該当します。基本的にその自治体に在住・通勤している方々をサービス対象としていますが、近隣の自治体住民でも登録可としている場合もあります。最近では「ビジネス支援」等、これから起業する方への支援や、その地域の中小企業への情報提供サービスを実施している図書館も数多く見られ、幅広いサービスを提供しています。東京都千代田区にある千代田図書館では、「図書館コンシェルジュ」といった資料購入のお手伝いや町案内まで対応するスタッフを配置して、注目を集めています。

3 大学図書館〈神大の学生・教職員利用可〉



神奈川大学図書館がこれに該当します。大学を構成する学生・教職員を対象に、その大学のカリキュラムや研究内容にあった蔵書構築をしています。よって、大学によって所蔵している資料の分野が全く異なります。基本的に大学図書館を利用できるのはその大学の関係者ですが、神奈川大学図書館の場合は、他の神奈川県内および横浜市内の大学図書館と連携をしていますので、みなさんもその加盟大学図書館を利用することが可能です。また、それ以外の大学図書館についてもご利用できる場合がありますので、神奈川大学図書館のカウンター（横浜の場合は2階レファレンスカウンター）までご相談ください。なお、他大学図書館を利用する場合は、きちんとルールとマナーを守って利用するようにしましょう。

- ・横浜市立大学図書館コンソーシアム ※要学生証（身分証）
（利用できる図書館例；横浜国大・関東学院大・東京都市大・明治学院大横浜・横浜市大等）
- ・神奈川県内大学図書館相互協力協議会
※要共通閲覧証・学生証（身分証）。共通閲覧証は各キャンパスのカウンターで即日発行します。
（利用できる図書館例；東海大・専修大生田・明治大生田・東京工芸大等）
また、最近では大学の地域貢献の一環として、地域の方々へ門戸を開放する大学も多くなっています。神奈川大学でも登録していただければ、一般の方も利用できるようになっています（有料）。

4 学校図書館

学校図書館とは初等・中等教育機関、つまり小・中・高校に設置されている図書館で、大学に入学するまでみなさんが利用してきた図書館です。やはり大学図書館と同様、学習・教育、生徒の成長に役立つ資料を収集しています。読書活動に力を入れているのも特徴です。神奈川大学には附属校があり、図書室がありますが、大学在籍者の利用はできません。

5 専門図書館〈神大の学生・教職員利用一部可〉



特定の機関に設置され、その専門分野の資料を収集し、専門領域の利用者に資料を提供する図書館を指しますが、非常にサービス内容等多岐に渡っているのが特徴です。専門図書館として具体的に例をあげると以下のような図書館があります。

- ・横浜美術館美術情報センター（横浜みなとみらい）
- ・印刷図書館（中央区新富町）
- ・積水ハウス住まいの図書館（代々木）
- ・日本交通公社旅の図書館（丸の内）

専門図書館は非常にたくさんあり、利用資格も異なりますので、各種図書館ガイドブックやその図書館のホームページ等を確認の上、利用するようにしてください。

以下に参考になる資料をあげておきます。

- ・「書店&図書館ガイド／東京」recoreco編集部編 メタログ 2004年（請求記号B023-104-232）
- ・「おもしろ図書館であそぶ／専門図書館142館完全ガイドブック」
毎日ムック・アミューズ編 毎日新聞社 2003年（請求記号B018-33）

みなさんが利用できる図書館は、たくさんあります。目的にあわせて上手に使ってみてください。

図書館の所蔵資料紹介

アマニタ・パンセリナ／中島らも著 集英社 1995年

今年2009年の芸能ネタで一番大きな事件と言えば、有名芸能人の薬物使用に関する事件だろう。違法薬物は一般に考えられている以上に広がりを見せているようだ。ここ数年、大麻の栽培や所持でお縄を頂戴してしまった大学生のニュースを聞くようになった。テレビではたびたび「住宅街で外国人から薬物を買う主婦」が顔にモザイクをかけられて放送される。

本書は「クスリ」について書かれた本である。この本には〈薬物をやってはいけません〉というような“正しい”言葉は一切書かれていない。目次には「ドラッグの一」から「ドラッグの十四」まで睡眠薬、毒キノコ、大麻、ガマ（ヒキガエル）、LSDなど様々なドラッグが並び「ラストドラッグ」のアルコールで終わる。著者が実際に体験した、あるいはしていないクスリや中毒の話に出てくる“酩酊を求める人々”。そこには死の匂いが漂い、実際に死に至った者達がいる。

著者はこう書く。「悲惨、という方がいらっしゃるなら、それは違いますよ、と答えておく。(中略)馬鹿、と言う方もおられよう。あなたは正しい。ただ、あなたは何にも中毒していませんか。してないわけがない。そんな人間はこの世にいない。中毒の対象は薬物だけではないのだ。」と。そして“そこ”に陥らないために必要なのはこの本に書かれたような情報、こうしたらこうなる、という情報であると。それを知った上で薬物に近づいていく人間が身を滅ぼすのは仕方が無い。そこから立ち直る人間はおそらく生きるべく定められているのだろう。それほど強さも強運も持ち合わせていない我々凡人は、「クスリ」などには近づかないほうが身のためだ。

著者中島らもは1952年生まれ。2003年大麻取締法違反で逮捕。2004年7月に階段から転落し、その怪我がもとで亡くなった。享年52歳。

(B914.6-951 横浜閉架)



パワー オヴ フォトグラフィ：写真が世界を動かした 上・下／

ウィッキ・ゴールドバーグ著 別宮貞徳監訳 淡交社 1997年



私達が一日に目にする写真の枚数はどれくらいの数に上るのだろうか。雑誌や新聞などの記事、街の広告看板、ポスター、商品に付いている写真などを含めると一説では一日におよそ千枚単位の写真を目にしていると言われている。自分の回りから写真がすべて消えてしまった世界を想像できるだろうか。新聞や雑誌は文字だけで、せいぜい手書きのイラストや版画が載る程度。自分が生まれる前に亡くなってしまった親類の顔もはっきりと知る事ができない。自分が確かにそこに(生きて)いたという証明も難しくなる。だが今から170年前まで、人々は写真のない世界で生きていたのである。

写真術が誕生した年は1839年とされている。この年はフランス科学学士院でその技術が発表された年であり、今年2009年は、写真術誕生から170年目にあたる。

写真が誕生してからというもの、世界中の人々が本物そっくりの姿を永久に留められるその魅力にとりつかれた。しかし写真が本当に大きな影響力を持つようになるのは、大量に生産されるようになり、新聞や雑誌などに印刷され、多くの人の手に渡るようになってからである。

本書は歴史を動かした数々の写真について、その一枚がどのような状況で写され、どのような背景によって人々の論議を醸し出し、社会に影響を与え、また一人の人間の運命を変えたかが書かれている。写真は“きわめつきの証人”であり、イメージを作るその力は強大である。世界一有名な肖像写真といわれるチェ・ゲバラのポートレートは、その生涯や革命、その死とともに人々の間に一つのイメージを定着させ“アイコン”と化した。1871年、誇らしげに集団ポートレートに加わったパリ・コミュンの人々は、その一枚の写真で身元が割れたことによって逮捕や死刑につながった。写真は社会改革運動の強力な助っ人となり、スキヤンダルを巻き起こし、人種差別との戦いの武器となった。「写真が世界を動かした」のである。

本書は現在のようにインターネットやCGがあたりまえと言う時代の前に書かれたものである。写真が大きな影響力を持ったのは、もう過去の時代だと思える人も多いだろう。だが、私達が目に見えるものに大きく影響されるという事実はいつの時代も変わらないのである。

(上巻 740.2-3-1
下巻 740.2-3-2 平塚開架)

貴重書目録『古典逍遙』刊行の時代

高橋 則雄

それは旧図書館の書庫の片隅にあった。子供のころ、よく小学校の職員室で見かけたニス塗りの古ぼけたガラス戸棚。わずか50冊ばかりの「貴重書」が、そこに眠っていた。1975年のころだ。

大学の創立50周年の記念事業として新図書館の建設計画が組上り上ったのが1976年。貴重書はこの事業の一環として次々に購入された。新図書館が落成した1980年の前後約10年間に、その冊数は千冊をはるかに超えていたのである。ほとんどは洋書だった。

貴重書を購入するにあたっては、図書館に配分された通常予算の枠外として、特別な措置がとられた。そのため、購入するたびに資料的価値と購入価格が適正であるか、その理由書を付したのである。

「図書館だより」に連載した貴重書の紹介は、この理由書をベースに執筆した。現在のように、古典や名著の解説本はなかった。糸口となる記事や論文を探すツールなど、現在に比べればなきに等しい時代だった。そのため、関連していそうな内外の図書・雑誌を探すことから始め、本文はもちろんのこと、脚注、引用文献などにも目をとおした。当時、30万冊ほどの蔵書だった本学図書館には限界があり、週末は豊富な蔵書をもつ他大学に足繁く通った。1ヶ月単位の「長期利用者証」を発行してくれた大学もある。海外の古書店の販売カタログを取り寄せ、価格について知識を補ったのもこのころだ。図書館に勤務してわずか数年目の職員にとって、身にあまる重責だったが、この試練は後に多くの局面で役立つことになった。

急増する貴重書の取り扱いをめぐる最初で浮上したのが、保存と利用に関する規程の整備だった。新図書館の建設に際して、貴重書の保存スペース（当初はコーナーとして洋書書庫の一角に設置）を確保したものの、貴重書を指定するための基準も、利用に関する規則もなかった。

図書館の奥深く秘蔵し、世界から隔絶するばかりでは、貴重書を購入した意味はない。学術、学問の源流をたどる道に光をかざし、知の快樂へわれわれを誘う。数百年を経たインクの色やページの質感、天金、三方金、見返しのマーブル、そして時に豪華な革装丁の貴重書をできる限り公開したい。しかし一方、稀少で高価な文化遺産であるという側面から無原則に手に取ることは許容できないというジレンマが生ずる。

貴重書としての基準を和書は1615年（元和元年）、洋書は1850年以前とし、それ以後の刊本を準貴重書とするという原則をたて、手稿、写本もそれに準じた。現在、和書書庫の一部に設置されている貴重書庫、準貴重書庫はその区分に従ったものである。貴

重書のマイクロフィルム撮影と展示ケースの設置は、公開と利用、保存における相克を解消するための、いわば利用規則の根底をなすものとして決めた。マイクロフィルムを利用して自由に貴重書に接することができるようにしたのである。書誌的な研究が目的であれば、直接利用の申請をすることになった。

フランス啓蒙主義の哲学、思想、経済学の原典を体系的に収めた「山口文庫」の冊子体目録を編纂したのが1977年。日本語翻訳版を待つことなく英語原書版をもとに、全国の大学図書館に先駆けて、洋書の目録規則改訂作業を進めたのは1980年代初頭のことである。当時、資料課と呼ばれた部署の館員たち（洋書担当）の目録作成能力は、これらの経験の蓄積もあり高い水準に達していた。1985年に貴重書の冊子体目録の刊行が決定された時、ごく自然に受け止めたことを憶えている。ルーティンワークの中で鍛えられていた力を応用するだけだったからだ。

貴重書目録『古典逍遙』の編纂にあたっては、「あとがき」にも述べられているように、検討委員会を設置した。松村裕一（部長）のもと、松岡博之（運用課）、原田広（資料課和書担当）、原中和繁と私（資料課洋書担当）の5名で構成し、編集作業をおこなうとともに解題原稿を分担執筆した。

目録本文は解題編、目録編、索引編から構成され、序文（佐野正巳館長）、あとがき（松村裕一部長）、内容解説、参考文献が付されている。本文には淡いクリーム上質紙を使用、版面は天をやや小さく、地を大きくとり、ノンブルはノド寄りとした。「普及判」は、表紙をこげ茶のクロス、銀鼠の見返し、明るい茶のヘドバン、緑のしおり紐を解題と目録を相互に参照できるように2本入れた。ジャケットは、目録に収録した『語泉』（Etymologiae Libri 1483年、ヴェネチア刊）の本文の一ページを利用してデザインしたものである。

150部限定の「特装判」は、濃紺の紬（つむぎ）織クロス表紙、浅黄のヘドバン、深紅のしおり紐を2本入れ、「普及判」に使用したジャケットを函にデザインし直して、特装函入りとした。奥付には、限定版であることを示す番号が一冊ごとに、鮮やかな朱色のインクで記されている。

『古典逍遙』の刊行は、その後続く資料公開の第一歩となり、銀座ミキモトホール（1989年）、埼玉県立近代美術館（1992年）、平塚市立美術館（2003年）の企画展等へとつながっていった。

館員はみな若く、時には甘く、ほろ苦い経験もあったが、美しい季節だった。

（たかはし のりお 審議役）

図書館からのお知らせ

横浜・平塚共通

◎ 長期貸出について

冬季長期貸出期間

12月1日(火)～12月26日(土)

冬季長期貸出期限日

2010年1月13日(水)

春季長期貸出期間

2010年1月25日(月)～3月27日(土)

春季長期貸出期限日

卒業年次生：2010年2月15日(月)

1年次～3年次生：2010年4月12日(月)

◎ 年末年始の休館日

12月27日(日)～2010年1月6日(水)

◎ 卒業年次生へ

図書館から借りている図書は、返却期限日までに必ず図書館に返却してください。

◎ 盗難への注意

盗難予防のため、貴重品(財布、携帯等)は席を離れる時、必ず身につけてください。

◎ マナーを守りましょう。

お互いに気持ちよく図書館を利用するために、下記の迷惑行為は止めましょう。

- お喋り
- ヘッドフォンの音漏れ
- 携帯電話での通話
- 指定場所以外でのパソコン・計算機の使用
- 飲食

図書館だより128号の一部配布分に誤りがありましたので、訂正いたします。

1p、8p

誤：ドラネ《玉乗りをする男、ヴィルヘルム一世》

正：ドラネ《玉乗りをする男、ビスマルク》

4p

誤：理事長の斎藤政雄氏(左段21行目)

正：理事長代理の斎藤幸一氏

誤：斎藤政雄理事長(右段下から3行目)

正：斎藤幸一理事長代理

編集後記

中世ヨーロッパの人間はどのように冬をすごしていたのかを、ある本で読んだことがある。電気もなく満足な暖房もない時代。一般民衆は勿論のこと、国王や貴族ですら冬の寒さから逃れることはできなかった。宮殿にある大きな暖炉でも体を十分に暖めることはできず、室内でも分厚い衣類を着込み寒さに耐えたのだという。

1566年にピーテル・ブリューゲルによって描かれた《バツレヘムの人口調査》という絵画がある。本来の主役は聖母マリアと夫ヨセフのはずであるが、この絵画の真の主役は雪におおわれた冬景色と、寒さの厳しい冬の夕暮れ時を外で過ごす多くの村人達である。この絵画のように、中世ヨーロッパの人々は寒い冬でも長い時間を戸外で過ごしたようだ。外よりはまだ室内のほうが暖かかったけれど、扉を閉めればガラス窓の無い家の中はたちまち暗闇に閉ざされてしまう。彼らは寒くても暗闇よりは光のある外で過ごすことを選んだようだ。

現代に生きる私達は暗闇に閉ざされることはない。夜になれば太陽の光の代わりに電灯の光が現れる。都会では24時間営業の店が真夜中の街路を明るく照らす。また私達は何の苦勞もなく暖かさを手に入れることができる。家に帰れば暖かい空間があり、いつでも温かい食事を口にできる。私達は暗闇も寒さも克服し、長寿も手に入れた。けれどブリューゲルが描いた中世の村人達の姿に、現代人にはない力強さを感じてしまうのはなぜだろうと思う。

(N.E.)

今号の表紙

Faustin 《Têtes de Pipe》

フォースタン《パイプの頭》1871?

“六つの顔が見分けられますか？(ロベール・マケールの家族)”

ロベール・マケールとは画家ドミエが考案した人物で見せかけの立派な仮面をかぶって、医者、弁護士、高利貸、株屋などどんな職業でもやりとおしてしまう男。資本主義隆盛の当時、そのような人間がいたるところに出現した。

石版画 35×26.1cm

神奈川大学図書館所蔵 パリ・コミュニケーション諷刺画の1枚。